

【研究論文】

保育者養成における音楽を用いた表現領域の学びについて —情景を想像する視点に着目して—

平尾 憲嗣* 滝沢 ほだか*

要 旨

平成 29 年に告示された幼稚園教育要領において、表現領域では「自然の中にある様々な音に耳を傾け、自然の動き等から発せられる音やリズムの面白さ等、子どもが得た感覚や感動を、他の子どもや教師と共有し、表現等を通して養うこと」等の内容が付加されている。それを踏まえ、保育者養成校では、学生自身がそれに伴う豊かな感性、広い視野による的確な指導法の理解と実践力の習得、その他の領域との横断的な繋がりを意識した活動を行うための応用力の習得が必要とされている。実際の子どもの主体的な遊びから生まれる表出や表現を援助するために必要な音楽的知識、技能の習得に留まらず、幼児曲から音の素材や情景をイメージし、音楽以外の表現活動との関連性を持った創造力の獲得の重要性について、予習や授業での活動において学生への意識づけを試みた。本研究ではこの試みにおける学生の意識の変容について調査し、効果的な授業方法について検討を行った。

キーワード：表現領域、音、音楽、情景

I. はじめに

文部科学省による学校教育法施行規則の改正に伴い新たに改訂された幼稚園教育要領や、教職課程の改変により、保育者養成校においては、従来の教科に関する科目として取り扱われていた音楽は廃止され、5領域における表現領域の中の音楽という位置づけが従来のものより明確となった。その変更へと至った背景としては、幼児期の発達に応じた音、音楽遊びについてや、それを表現する楽しさについて掘り下げていく内容よりも、音楽における演奏技術の向上等、演奏における専門的内容が優先される授業内容となる傾向が強かったことが推測される。従って、今後は5領域における各領域での繋がりを理解しながら、幼児の援助についての知識や技能を深め、幼児の指導法の獲得を到達目標に置いた授業へと転換していくことが重要であると考えられる。

その一方で、幼稚園の現場では、季節や行事に関連したリズム遊び、楽器遊び、幼児曲の歌唱、ピアノ弾き歌い等が慣例的に普段の幼児の遊びの中で取り入れられており、幼児がそれらの音楽を主とした活動から得られる経験は、幼保連携型認定こども園

教育・保育要領で示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（図1参照）と照らし合わせてみても、様々な項目において重要であることが推測される。また、それらの音楽を用いた活動について、CD等の録音媒体を利用してそれらの音楽遊びを行うことも可能であるが、感受性を育むうえで大変重要な時期である幼児期においては、その利便性に囚われることで、音や音楽における様々な楽器の材質による本来の音質、音や音楽における自由な表現のやり取り等、感覚的に本来の音楽の楽しさを味わうことが失われてしまうことに留意することが重要と考える。従って、幼稚園教育要領における表現領域の内容を達成するために必要最低限の音楽技術や知識を身に付けておく必要があることには変わり無く、更に、幼稚園教育要領の表現領域に新たに加えられた、「風の音や雨の音、身近にある草や木の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」について、幼児が身の回りの自然から五感を通して感じる感覚を、主体的な遊びの中で表出、表現することができるよう、自然の中の様々な動きや、それにより発生する音等の動きやその特徴を捉え、それを遊びとして発展させる技術や

*岡崎女子短期大学

感性が保育者には求められる。

また、それを基に幼児の表出や表現を援助していくためには、必要最低限の音楽技術や知識の上に立った、自由な発想力が必要であり、表現領域における造形、身体表現等との横断的な繋がりを音や音楽からイメージすることのできる応用力を兼ね備えていることが重要である。その他に、幼稚園で過ごす3年間の様々な体験が小学校の教育課程へと繋がることを認識し、そこへと繋げていくために、保育を計画的な見通しをもって展開することも必要である。保育者養成校としては、それらの知識、技能を実践で活かすことのできる保育者の育成が求められている。そのため、今回の研究では、幼児曲から音の素材や情景をイメージし、音楽以外の表現活動との関連性を持った創造力の獲得を目標においた指導について、その授業効果を明らかにし、その結果を踏まえ授業運営の検討を図ることを目的とする。

図1 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と音楽の関連性について

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	
①健康な心と体。	・規則正しく朝、昼、夕等に皆元気に歌ったり、歌いたい曲を楽しく歌ったり、歌が付いた体操等を楽しむことで、健康な心や体を保つ楽しさを味わう。
②自立心	・劇や合奏等の過程で主体的な活動を通じて、自分の与えられた役割を諦めずやり遂げ達成感を味わい自信をつける。
③協同性	・手遊び、劇や合奏等の過程で友達や先生と一緒に考え、工夫し、協力する楽しさを実感する。
④道徳性・規範意識の芽生え	・わらべ歌、手遊び、劇、合奏等の過程で、それぞれの決まりごとやルール等について理解し、規範についての重要性を理解する。
⑤社会生活との関わり	・地域に根付くわらべ歌や幼児曲等を通じて、家族、地域とのつながりを実感する。
⑥思考力の芽生え	・自然の音、手作り楽器物の性質や仕組みを感じ取り、模倣する等の過程を経て、気づき考え工夫する大切さを感じる。
⑦自然との関わり・生命尊重	・自然の音、自然に関係する幼児曲や劇等に親しむことで、自然への愛情や畏敬の念を、歌や音楽を通して感じる。
⑧数量や図形、標識や文字等への関心・感覚	・数量、図形、標識や文字の役割を、絵描き歌、手遊び、幼児曲を通して、遊びとして興味を持つ。
⑨言葉による伝え合い	・複数で行う手遊びや劇の練習や劇中等における言葉の投げかけや友達との音楽のやり取り等をする中で、言葉による伝え合う楽しさを感じる。
⑩豊かな感性と表現	・様々な音や音楽を肌で感じ、声、動き、楽器等で自由に表現する楽しさを味わう。

II. 授業構成

本学の幼児教育学科第一部（短期大学）での、基礎音楽、幼児音楽において、平成31年度に運用される新教職課程を見据え、改変された意図を汲んだ上で、学生が卒業までに習得すべき内容について改めて検討を行った。一年次の基礎音楽Ⅰ、Ⅱでは、主にピアノの基礎的技術の獲得と、幼児曲演奏のための伴奏における仕組みについての理解と実践に重きを置いた授業内容を行っており、基礎音楽Ⅰ、Ⅱの授業の目的について、「子どもの音楽活動を援助できる力を育成するため、①豊かな感性と音楽の基礎的スキルを身につける、②自身の創造力や表現力を養い、音楽の実践力を獲得することを目的とする。授業では、MLシステムを活用した集団授業と個人指導を行い、弾き歌いや基礎的な鍵盤楽器の奏法などを習得する。」と掲げており、授業の到達目標としては、「①バイエル教則本の楽語について説明することができ、バイエル 100番まで演奏することができる。②バイエル終了者は、練習曲以外のピアノ曲を暗譜で演奏することができる。③簡易伴奏法のためのコードネーム（ハ、ト、ヘ長調）について、見譜で演奏することができる。④幼児曲（子どものうた村Aレベル）について、暗譜で弾き歌いを行うことができる。」という目標を設定している。

それを経た二年次の幼児音楽Ⅰ、Ⅱの授業では、一年次よりも難易度の高い幼児曲の学習と、現場を想定した多様な表現方法の獲得に重きを置いた授業を行っている。幼児音楽Ⅰの授業の目的は「基礎音楽での学習をふまえ、様々な音楽活動を通して、音楽の表現力および演奏技能を高めることを目的とする。また、保育実践において子どもの音楽表現活動を支援するために必要な知識や技能も同時に修得する。」とし、授業の到達目標として「①春、夏の季節を中心とした幼児曲10曲以上を暗譜で弾き歌いすることができる。②簡単なコードを使って幼児曲に伴奏をつけることができる。」として授業を行っている。授業内における新たな試みとしては、基礎音楽Ⅰ、Ⅱでの段階的な学びを（表1、2参照）経た学生に対し、幼児音楽Ⅰでは幼児曲の課題として、季節に因んだ14曲を学生に課し、15回の授業における内容を表3の通り設定した。「幼児音楽Ⅰ」では、従来の授業では、弾き歌いにおける伴奏法や、幼児と一緒に幼児曲を歌う上での配慮や工夫について重点を置く指導内容であった。今回はそれに加え

て、それぞれの幼児曲の作曲された背景を伝えるのは勿論の事、表現領域における造形、身体表現等との横断的な繋がりを音や音楽からイメージする意識をもつための第一歩として、幼児曲の歌唱における歌詞の意味、歌の中の登場人物は誰か、誰とお話しているのか、音、リズム、音楽が何を模倣しているのか等、それぞれの曲の特性を捉えながら歌唱による実践を行うこととした。それを基に想像することのできる情景等についての理解を掘り下げ、漠然とした表現に留まらず、発展性のある表現について理解を深めることに重点をおいた指導を行う。

表1 基礎音楽Ⅰの授業計画について

授業回数	授業内容
1	授業ガイダンス
2	楽譜の読み方
3	バイエル・幼児曲（こいのぼり等）・音楽理論（音符の種類）
4	バイエル・幼児曲（ちょうちょう等）・音楽理論（拍子・リズム）
5	バイエル・幼児曲（どんぐりころころ等）・音楽理論（速度を表す楽語）
6	バイエル・幼児曲（ぶんぶんぶん等）・音楽理論（強弱を表す楽語）
7	バイエル・幼児曲（かたつむり等）・音楽理論（表情を表す楽語）
8	前期中間まとめ①・今後の学習課題について
9	バイエル・幼児曲（たなばたさま等）・音楽理論（演奏順序を表す楽語）
10	バイエル・幼児曲（あさのうた等）・音楽理論（音程）
11	バイエル・幼児曲（きんぎょのひるね等）・コード（コードの種類と調性）
12	バイエル・幼児曲（生活の歌から）・コード（ハ長調の主要三和音）
13	バイエル・幼児曲（どうぶつの歌から）・コード（ハ長調のコード練習）
14	復習と確認
15	前期末まとめ②・後期に向けた学習課題について
16	なし

表2 基礎音楽Ⅱの授業計画について

授業回数	授業内容
1	授業ガイダンス
2	ピアノ曲・幼児曲（せんせいとおともだち等）・コード（ハ長調の主要三和音）
3	ピアノ曲・幼児曲（大きなくりの木の下で等）・コード（ハ長調の練習）
4	ピアノ曲・幼児曲（とんぼのめがね等）・簡易伴奏（ハ長調コードの応用）
5	ピアノ曲・幼児曲（まつぼっくり等）・コード（ト長調の主要三和音）
6	ピアノ曲・幼児曲（こぎつね等）・コード（ト長調の練習）
7	ピアノ曲・幼児曲（おかえりのうた等）・簡易伴奏（ト長調コードの応用）
8	後期中間まとめ①・今後の学習課題について
9	学生音楽祭（音楽鑑賞）
10	ピアノ曲・幼児曲（ジングルベル等）・コード（まとめ）
11	ピアノ曲・幼児曲（たきび等）・簡易伴奏（ハ長調の幼児曲）
12	ピアノ曲・幼児曲（ぞうさん等）・簡易伴奏（ハ長調の幼児曲）
13	ピアノ曲・幼児曲（おべんとう等）・簡易伴奏（ト長調の幼児曲）
14	ピアノ曲・幼児曲（さよならのうた・手をたたきましょう等）・簡易伴奏（応用）
15	後期末まとめ②・幼児音楽Ⅰに向けた学習課題について
16	なし

表3 幼児音楽Ⅰの授業計画について

授業回数	授業内容
1	前期授業ガイダンス
2	幼児曲の弾き歌い（かわいいかくれんぼ・ことりのうた等）・音楽理論（基礎音楽Ⅰ・Ⅱの復習）
3	幼児曲の弾き歌い（ぼかぼかてくてく・とけいのうた等）・コード（基礎音楽Ⅰ・Ⅱの復習）
4	実習に備えて（一人です遊び）
5	実習に備えて（二人以上です遊び）
6	幼児曲の弾き歌い（めだかがっこう・はなび等）・簡易伴奏法（春の歌から）
7	幼児曲の弾き歌い（しゃぼんだま等）・簡易伴奏法（夏の歌から）
8	前期中間まとめ①・今後の学習課題について
9	幼児曲の弾き歌い（おぼけなんてないさ・つき等）・音楽理論（音程）
10	幼児曲の弾き歌い（山の音楽家・あめふりくまのこ等）・音楽理論（調性）
11	幼児曲の弾き歌い（もりのくまさん等）・音楽理論（移調）
12	幼児曲の弾き歌い（おもちゃのちゃちゃちゃ等）・簡易伴奏法（生活の歌から）
13	幼児曲の弾き歌い（南の島のハメハメハ大王等）・簡易伴奏法（応用）
14	復習と確認
15	前期末まとめ②・後期に向けた学習課題について
16	なし

Ⅲ 研究方法

1) 調査概要

幼児音楽Ⅰの授業における課題である幼児曲14曲(表3参照)について、各回の授業内で表4に示す指導をおこなうこととした。特に、幼児曲の歌詞の情景を創造することに重きをおき、表現に結びつける留意点を、歌い手(語り手)の視点を含んだ5つに分類した。

- ①登場人物(動物や物等を含む)
- ②複数の登場人物(動物や物等を含む)
- ③ナレーション(保育者)
- ④登場人物(動物や物等を含む)とナレーション(保育者)
- ⑤ナレーション(保育者)と幼児

保育者養成校における授業において、上記5点の表現の工夫について実践を交えた指導を行う群(実験群)と、比較検討の対象として一般的な表現方法について指導を行う群(統制群)を設け、表現の工夫について実践を交えた指導を行った群の自信が高まるかどうかについて、調査を行う。統制群については、後期の授業において実験群と同じ内容を取り扱う配慮を行うものとする。

表4 課題曲の表現獲得に向けた指導内容について

曲名	歌い手の種別	表現獲得のための留意点
かわいいかくれんぼ	③	・ひよこ、すずめ、こいぬのそれぞれの動きや泣き声等の特徴の把握する ・歌いだしのデクレシェンドの意味(喋り方)をイメージする ・びよこびよこ、ちょんちょん、よちよちの動きのイメージを想像し、動きを真似してみる ・おにわ、おやね、のはらのそれぞれのイメージを想像する ・「○○がみえてるよ」はどのような気持ちで語られているか ・「だんだんだ〜れがめっかった」の旋律とわらべ歌の特徴との繋がりの把握する
こよりのうた	③④	・歌のどの部分でナレーションや小鳥が語っているかを理解する ・かあさん、とうさんのそれぞれのイメージを把握し、1番と2番で同じ表現にならないように工夫する ・「ビビビビビ チチチチチ ビチ クリ ビイ」を小鳥の気持ちになって、どのような言葉を歌っているのかを日本語で創作する
ぼかぼかてくてく	⑤	・行進のリズムを楽しむ ・4分音符と3連符の部分の表現の違いについて認識する ・1番から5番までの冒頭の言葉「さあ、ても、みんな、ほら、ハイチャ」について、それぞれが誰に(何に)向かって声をかけているのかを考える ・動きや顔の表情や隣の人とのハイタッチ等、動きを取り入れながら歌う
とけいのうた	③④	・時計の針の様子、特徴を把握する ・「おとけいさん」や「うごいてる」はどのような気持ちで語られているか ・子どもの針、大人の針はどの針のことなのかを考える ・「こども」、「おとな」が同じ表現にならないように人間等のこども、おとなのイメージを表現に用いて、工夫する ・「こんには さようなら」が同じ表現にならないように工夫する(初めての挨拶、何回もしている挨拶、こどもとおとなの挨拶、挨拶の仕草)
めだかの学校	③	・「めだかの学校は」の後の歌の休符部分の左手の伴奏は何を表現しているかを考える ・歌の中で2度続く「そっとのぞいてみてごらん」のそれぞれに付けられたハーモニーの響きの感覚がどのように異なっているかを感じる(原曲の伴奏譜から) ・「つーいつい」はめだかのどのような様子かを把握する

はなび	③	・「ドン」の大きさを手で表現する ・「きれいだな」の前に「○○のように」と言葉をつける ・1番から2番への歌の流れが、実際の花火が絶え間なく上がりクライマックスにむかっていく様子をイメージする ・左手の伴奏のリズムから、祭りの太鼓等のイメージを膨らませる
しゃぼんだま	③	・屋根までの高さを手で表現しながら歌う ・歌の旋律の流れを把握し、歌の2、4、6、8小節目が起承転結のような表現になるように工夫する ・「かぜかぜふくな」の部分のみ、ピアノの伴奏がすべて無くなり歌だけになる意味を考える(原曲の伴奏譜から)
おぼけなんてないさ	①	・歌いだしの「おぼけなんてないさ」からの4小節目はどのような気持ちで子どもが歌っているのかを想像する ・5、6小節目の歌い方を、歌いだしの歌い方と違う表現になるように工夫する ・7、8小節目の「おぼけなんてないさ」は歌いだしの「おぼけなんてないさ」と比べてどのように表現するべきかを考える ・3連符と付点4分音符8分音符のそれぞれの言葉と心情に合わせた表現をイメージする
つき	③	・「でたでた」どこから出てきたのかをイメージする ・「ま〜るい まんまるい、く〜ろい まっくろい」のリズムを効果的に使った表現について工夫する ・いつも見えているものなのか、滅多に見れないものなのかを考えて、歌詞の語り方を考える
山の音楽家	②	・この曲の特徴である弱起を丁寧に扱い、表現の手助けとなることを認識する ・山の音楽家の演奏を誰が聴きに来ているか想像する ・「わたしゃおんがくか山の○○」の歌の冒頭はどのような気持ちで歌っているかを考える ・りす、ことり、たぬきの動きや様子等の特徴を捉え、それぞれが違う表現になるように工夫する(パイオリン、フルート、たいこのイメージも参考に)
あめふりくまのこ	③	・前奏から後奏までの情景を、歌詞を読み聞かせのように読んで、物語を把握する ・歌いだしから4小節目にあるテヌートの意味を考え、5小節目からの表現に繋がることを認識する ・どのような山にどのような雨が降ったのか、具体的にイメージする ・やさしく話しかけるように歌うために付点のリズムの扱い方を考える ・この曲における付点のリズムがどのような雰囲気を作り出しているかを把握する ・間奏から4番歌い始めまでの、くまのこの様子を創作しイメージする(4番の出だしの表現を活かすため)
もりのくまさん	②	・前奏から終わりまでの情景を、歌詞を読み聞かせのように読んで、物語を把握する ・どのような森なのか、いつも行く森なのか、どのような花が咲いているのか等、さまざまな情景をイメージする ・この曲の特徴である弱起を丁寧に扱い、表現の手助けとなることを認識する ・女の子が状況を語っている部分、女の子が実際に話している部分、クマさんが実際に話している部分、会話の部分等を具体的に把握し、それぞれの表現を工夫する ・最後の「ララララ」について、そこに言葉を入れるとしたらどのような言葉が入るか、どのような気持ちかを表現するように工夫する
おもちゃのチャチャチャ	③④	・本場のチャチャチャのリズムについて認識し、この曲の中で活かせるよう楽しく歌う ・前奏から終わりまでの情景を、歌詞を読み聞かせのように読んで、物語を把握する ・この曲に出てくるそれぞれのおもちゃの特徴をイメージし、動きや色や声などを創造しておく ・4番のおもちゃが帰ってってしまう部分の表現を工夫する
南の島のハメハメハ	③	・前奏から終わりまでの情景を、歌詞を読み聞かせのように読んで、物語を把握する ・南の島について実際にどの国をイメージするかを考える ・南の島と我々の生活とを比べ、かけ離れている部分、近い部分をそれぞれの歌詞の部分から読み取る ・王様、女王様、王子様、住民達の様子を想像し、それぞれイメージに合った表現を工夫する

2) 対象者

平成 28 年度に入学した幼児教育学科第一部生を対象として調査をおこなう。3 クラス 126 名を実験群とし、1 クラス 41 名を統制群として比較検討を行う。

3) 質問紙調査

1 年前期の基礎音楽Ⅰ終了時、1 年後期基礎音楽Ⅱの終了時、2 年前期幼児音楽Ⅰ終了時の計 3 回、同じ質問紙を用いて調査を行う。質問項目を図 2、図 3 に示す。質問項目は行動目標の形式設定し、質問に対する回答は「大変できる」「できる」「少しできる」「どちらでもない」「少しできない」「できない」「大変できない」の 7 件法で回答を設定した。

図2 質問項目(音楽技術力)の内容について

1. 音楽技術力について
①幼児曲における楽譜について、拍子、音符の長さ、リズム、演奏順を正しく理解できている
②幼児曲のピアノ伴奏を正しい指使いで弾くことができる
③幼児曲のピアノ伴奏におけるコードの知識を理解できている
④幼児曲のピアノ伴奏において、鍵盤を凝視せずに演奏することができる
⑤幼児曲の弾き歌いについて、子どもを意識した演奏ができる(歌いだしの合図等)
⑥幼児曲を明るく伸びやかな声で歌唱することができる
⑦幼児曲の歌唱について、正しい歌詞の意味を理解できている
⑧幼児曲のレパートリーを増やすことができる

図3 質問項目(音楽表現力)の内容について

2. 音楽表現力について
①幼児曲における楽譜について、表現に関係する記号(強弱記号)を意識して演奏することができる
②さまざまな幼児曲について、曲のイメージ(情景など)を頭に思い描くことができる
③幼児曲の伴奏で、曲にふさわしい表現を自ら考え、工夫して演奏に活かすことができる
④幼児曲の歌唱について、曲にふさわしい音楽の表現をもって歌唱をすることができる
⑤豊かな表現力をもって、子どもの音楽活動を援助することができる
⑥音や音楽を用いて子どもの表現を引き出すことができる

4) 分析方法

分析は「大変できる」「できる」「少しできる」をポジティブ群(P群)、「少しできない」「できない」「大変できない」をネガティブ群(N群)として分類し、①基礎音楽Ⅰ終了時と基礎音楽Ⅱ終了時の比較、②基礎音楽Ⅱ終了時と幼児音楽Ⅰ終了時の比較、を行い、それぞれについて χ^2 検定または Fisher's exact test (標本数 10 未満)を用いて分析を行う。

IV 結果と考察

質問紙調査の有効回答は、実験群 116 名、統制群 28 名であった。3 回に渡る継続的な調査を行ったため、欠損のあるデータを除外したところ、上記の有効回答数となった。今回は情景を想像するという点から、特に音楽表現力の内容に関する質問項目について着目し、分析をおこなった。実験群と統制群の各項目別回答人数を表 5 と表 6 に、分析結果を表 7 と表 8 に示す。

分析結果から、音楽表現力に関する質問項目 1～6 の全てにおいて、1 年前期基礎音楽Ⅰ終了時と 1 年後期基礎音楽Ⅱの比較で、実験群、統制群共に有意に自信が高まることが明らかとなった。1 年の前期はバイエルを中心とした基礎基本の修得に重きを置いているが、1 年後期は本格的に幼児曲に取り組み、課題曲の弾き歌いを通して表現力が身についたという実感が顕著に現れることが、この結果に繋がったと推測される。

また、実験群と統制群とに分けて表現指導の工夫を行った 2 年前期幼児音楽Ⅰ終了時では、1 年後期基礎音楽Ⅱ終了時との間に有意差が出ない項目が複数みられた。また、統制群においては、同時期の比較において、全ての項目で有意差がでないということも示された。このような結果になった原因の 1 つとしては、2 年次の課題として設定されている幼児曲の難易度が 1 年次と較べて高いことが推測される。1 年終了時にはある程度の自信を持ったものの、困難な曲に直面したことで、表現を工夫する指導をおこなったとしても、なかなか自信が高まらないことが示唆される結果となった。

その一方で、本研究の成果としては、項目 2 「さまざまな幼児曲について、曲のイメージ(情景など)を頭に思い描くことができる」、項目 6 「音や音楽

を用いて子どもの表現を引き出すことができる」について、実験群のみ1年終了時と2年前期終了時に有意差が出たことが挙げられる。情景を想像する視点を5つの観点から具体的に取り入れることで、イメージを頭に思い描き、それらの表現を用いて、子どもの表現を引き出すことができる、という自信に繋がったことが示唆された。

表5 実験群(3クラス:116名)の項目別回答人数

質問項目 質問時期	2-①			2-②			2-③			2-④			2-⑤			2-⑥		
	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ
大変できる	5	7	6	1	6	7	2	4	4	1	4	7	1	3	6	0	3	1
できる	4	23	18	4	21	22	2	8	6	2	14	12	1	10	11	3	8	12
少しできる	12	47	43	9	43	53	3	34	40	7	40	34	2	31	45	1	24	39
どちらともいえない	15	20	28	24	28	28	13	32	38	15	34	42	22	44	32	15	51	46
少しできない	28	12	14	24	12	2	15	19	21	24	13	17	24	18	16	18	19	14
できない	22	7	6	28	5	4	39	14	6	35	9	4	31	8	5	39	9	2
大変できない	30	0	0	25	1	0	42	5	1	32	2	0	35	2	1	39	2	2

表6 統制群(1クラス:28名)の項目別回答人数

質問項目 質問時期	2-①			2-②			2-③			2-④			2-⑤			2-⑥		
	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ
大変できる	0	3	1	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
できる	4	5	6	2	6	3	0	5	2	0	2	4	0	3	2	0	2	2
少しできる	5	11	6	5	9	16	4	6	7	2	11	5	2	7	10	1	9	8
どちらともいえない	3	2	8	4	6	4	5	8	11	5	6	12	6	10	13	4	11	13
少しできない	3	6	4	2	4	2	3	3	5	5	8	6	6	5	2	7	3	4
できない	7	1	2	9	2	1	3	6	1	8	0	0	8	2	0	9	3	0
大変できない	6	0	0	6	0	0	13	0	0	8	1	0	6	1	0	7	0	0

表7 実験群(3クラス:116名)の分析結果

質問項目 質問時期	2-①			2-②			2-③			2-④			2-⑤			2-⑥		
	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ
P群	21	77	67	14	70	82	7	46	50	10	58	53	4	44	62	4	35	52
N群	80	19	20	77	18	6	96	38	28	91	24	21	90	28	22	96	30	18

*, $p < 0.05$ **, $p < 0.01$

表8 統制群(1クラス:28名)の分析結果

質問項目 質問時期	2-①			2-②			2-③			2-④			2-⑤			2-⑥		
	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ	基Ⅰ	基Ⅱ	幼Ⅰ
P群	9	19	13	7	16	20	4	11	10	2	13	9	2	10	12	1	11	10
N群	16	7	6	17	6	3	19	9	6	21	9	6	20	8	2	23	6	4

*, $p < 0.05$ **, $p < 0.01$

V. まとめ

今回の調査により、本学における基礎音楽Ⅰ、Ⅱと幼児音楽Ⅰを履修した学生が、音楽の基礎知識や基礎技能の獲得だけに留まることなく、表現における第一歩である、音や音楽からイメージすることに関して、幼児音楽Ⅰで行った新たな試みを経て、一定の効果があったことが明らかとなった。また、一年次の基礎音楽Ⅰ、Ⅱの学習における学習成果について、学生自身が音楽の表現力について大きな実感を感じていることも併せて明らかとなった。

このことから、基礎音楽Ⅰ、Ⅱにおける授業の内容については、音楽技術力、音楽表現力獲得に向け、効果的な内容を含んでいることが分かり、今後の授業運営について、課題となる幼児曲等の小さな修正については随時検討していくことは必要であるが、授業の目的や授業の到達目標等に大きな変更を加える必要が無いことが認められた。また、幼児音楽Ⅰでの授業内容について、今回の調査で効果が認められた質問項目である、「さまざまな幼児曲について、曲のイメージ（情景など）を頭に思い描くことができる」、「豊かな表現力をもって、子どもの音楽活動を援助することができる」の2つの要素の獲得が認められたことで、表現における造形や身体表現等への横断的な関係性を構築していく上で、音楽側からのアプローチについての視野を広げることが可能であることが確認できた。

その一方で、質問項目「音や音楽を用いて子どもの表現を引き出すことができる」については、基礎音楽Ⅰ、Ⅱと幼児音楽Ⅰを経て有意な変化が見られなかった。この要素については、音楽技術力、音楽表現力に加えて、現場をイメージした応用力が必要であり、この項目に加えて「さまざまな幼児曲について、曲のイメージ（情景など）を頭に思い描くことができる」、「豊かな表現力をもって、子どもの音楽活動を援助することができる」の2つの要素と合わせて、学生の獲得の実感が高まることにより、音楽分野からの視点による表現領域での、幼児への指導法の獲得へと繋がっていくことが予想されるため、これらの獲得へ向けた授業設計の見直しが必要である。

幼児音楽Ⅰにおける課題点としては、基礎音楽Ⅰ、Ⅱで取り上げている幼児曲の難易度が高くなることで、学生のコード奏や楽譜の簡易化等の技術が求められる、個々の実力に合わせた伴奏へと簡略化させる

知識的、技術的な応用力が求められることである。この段階において必要な視点は、幼児を意識した音楽の実践であるが、伴奏のリズムが複雑になり、多様な和音が用いられ、歌の旋律における音の動きが多くなる等、様々な面での音楽的要素における難易度が高くなることにより、歌や音楽の表現にまで意識が回らない状況に陥ってしまうことである。そのため、特に難易度の高い課題については、音楽の骨組みとなる部分のみの構成による伴奏でも、その音楽の持つ性格が大きく変わらないことを学生が理解し、歌の表現を伴った簡易伴奏による幼児曲の弾き歌いを推奨していくことが必要となる。幼児音楽Ⅰにおけるそれらの課題を修正した上で、卒業年次後期に開講している幼児音楽Ⅱへと繋げていくことが、今後の大きな検討事項といえる。

短期大学では、2年間で現場での即戦力となる人材の育成が求められていることから、「幼児音楽Ⅱ」において、実践力と応用力もって、子どもの音楽活動を援助することができるよう、授業内容をさらに精査していく必要がある。それにより、表現領域における造形や身体表現を用いた実際の幼児との遊びの中から、自然に保育者がその遊びの中で音や音楽の使い方をイメージすることができるようになれば、幼児の遊びの中から、幼児の表出や表現を、幼児の五感を刺激しながら、更に発展させることができると推測される。そのため、幼児音楽Ⅱでは、サウンドスケープ等の身の回りにある何気ない音への意識を深め、それを音や音楽を用いて模倣的に表現する技術を高めるなど、既存の音楽を表現する受動的な音楽の捉え方ではなく、能動的に音楽を創造し実践へと結びつけることのできる内容を授業の中に取り入れていく必要がある。

また、幼保連携型認定こども園教育・保育要領で新たに示された、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、音や音楽を用いた保育の活動がどのように繋がる可能性を持っているのかを学生が把握することで、現場での見通しのある保育の計画を立てることに結び付く。幼児音楽Ⅱでは、合奏、合唱や簡易的な劇等の実践を取り入れ、その過程において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の項目に含まれている、「自立心」、「協同性」、「言葉による伝え合い」等の音楽以外の学びについても学生自身の実践から得られる経験などから、音や音楽を用いた活動との関連性について認識できるような授業内容の検討が必要である。また、「豊か

な感性と表現」についても、発達段階に応じた音や音楽遊びの用い方等、個々の特性を考慮しながら保育の中で取り入れていく視点も重要である。これらの要素を幼児音楽Ⅱの中で対応する内容を模索検討していくことが今後の課題といえる。さらに、これらを踏まえ、小学校課程へと繋げていく視点を学生が認識できるよう、それに向けた段階的な遊びについて、学生が計画、実践することのできる知識や技能の獲得を、授業の到達目標に置き、それに向け必要となる新たな教材についての検討も今後は行っていきたい。

参考文献

- ・無藤隆、汐見稔幸、砂上史子（2017）『ここがポイント！3法令ガイドブック』フレーベル館
- ・吉富功修、三村真弓（2015）『幼児の音楽教育法』ふくろう出版
- ・上笙一郎（2005）『日本童謡辞典』東京堂出版
- ・畑中圭一（2007）『日本の童謡』平凡社
- ・長田焼二（2006）『日本童謡名曲集』全音楽譜出版社

執筆分担

平尾：第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章（表4）、第Ⅴ章

滝沢：第Ⅲ章（表4を除く）、第Ⅳ章